

一一 日本アナキスト連盟と共に

京都でのアナ連大会

一九四六年（昭和二十年）四月、高雄から引き揚げてきた山鹿は、兄とも相談してしばらく京都に落ち着くことにした。一つには戦死の知らせのあった大次郎が、万一比島の誰かを頼って生き延びていて、ひょっとして帰ってくるかもしれない——それを待つ気持ちも強かった。しかし故郷の京都では、山鹿は注意人物としてまだ記憶されていて、戦後の混乱とインフレのなかでは、なかなか就職口がなかった。昔なじみの便利堂印刷の社長に頼み込んで、ようやく仕事口をみつけることができた。こうして山鹿は印刷の経験と英語を使って、五四年二月に上京するまでの八年間を京都で働くことになったのである。

× × ×

その頃、戦争をくりぬけて生き残ったアナキストたちは、全国的な連合組織をつくるべく動き出していた。半年近い準備活動の末、四六年五月一二日「日本アナキスト連盟」が発足した。顧問に石

川三四郎、全国委員長に岩佐作太郎、全国委員に近藤憲二、水沼辰夫、秋山清、岡本潤、綿引邦農夫、伊串英治、逸見吉三、佐竹良雄、栗原唯一、青山大学、白井新平らが選出された。

おそらく引き揚げ直後のどさくさで、充分連絡がとれていなかったのだろうか、ここにはまだ山鹿の名前がみえていない。が、六月一五日に創刊された機関紙『平民新聞』八月七日の第三号では、はやくも次の文章を寄せている。「いろいろの考え方を持った人を包含していくためには、紙面に、極端に統一された記事は望みにくい筈だ。編集はつとめて、違ふ意見の記事を載せるようにして、紙上を討論場にした方がよい。そうして蔭でぐずぐずいうことをなくしたいものだ。……将来ふたたび不幸な戦争がはじまっても、日本人は一人も参加しないという永世中立の宣言を、我々が率先して世界に発表したい」——この短い文章にも汲み取られる「連盟組織のあり方と強化、同志間の融和」と「反戦平和」への発言は、その後の「国際的な連帯と国際部の運営」とともに、戦後の山鹿の活動の三本の柱として、一貫して続けられたものであった。

日本アナキスト連盟第二回大会は一九四七年五月一〇、一一日、東京芝日赤講堂で開かれた。山鹿は出席できなかったが、全国委員に推され、それ以前からすでに受け持っていた平民新聞京都支局を守って、小笠原秀実、市川白弦、高橋良三ら大学教授らの協力と、竜武一郎、松田稔、石田三郎らの若い人々の助力によって新聞配布を活発に行った。その頃からようやく外国同志との連絡が取れ始め、山鹿の海外情報は『平民新聞』紙上に新しい国際的視野を提供するものとなった。

四八年五月一五、一六日の第三回大会で、山鹿は「運動の積極的国際化ならびに交流に関する件」を提案し、それによって国際部の設置が決定した。そして海外からくるエスペラント通信その他を載

せる「エス語欄」を『平民新聞』に常設すると共に、国際部取り扱いの図書広告などが毎号載るようになった。姫路から出ていた評論紙『無政府主義会議』四八年四月の第三号に、山鹿は「世界革命促進の機運」と題して次のように書いている。「定期刊行物の国外郵送の途が開かれた。我らの運動を国際的運動に進展せよ。国土を愛する土民主義と同時に、広く世界人たる実力を養え。……方法論に固執するな。志ある所必ず方法あり。民衆をして志あらしめよ。……物心の調和即ち唯物論と心理学の契合により世界共通の連帯観念を發達普及せしめよ。」

第四回大会は四九年五月七、八日に芝中央労働会館講堂で開催された。山鹿は「世界アナキスト連合へ加盟の件」「極東アナキスト会議開催準備促進の件」「アナキスト相互扶助機関設置の件」を提案し、国際部としてまた京都地協として、運動の国際化と地道な同志間の連帯を主張した。

これらは世界大会への不参加に代るメッセージの送付、国際部を実行委とする極東大会開催のための連絡開始、および救済部の設置によって現実化の一步をふみ出した。しかしこのころから、『平民新聞』の列車販売の低下などで、新聞の発行財政は極端に悪化し、さらに編集者への個人的批難、とくに東京地協内での感情的軋轢が表面化してきた。そして八月二二日に一二九号を出したまま発行は中止した。一〇月に開かれた全国委員会で、週刊『平民新聞』廃刊が決まったが、そのあと広島で発行することになり、それが行き詰ると今度は岡山から出すなどの変転をしつつ苦難の道が始まった。こうしたなか第五回大会——五〇年五月の時期を迎えることになったのであったが、東京地協内の対立はいよいよはげしく、そのとばっちりによって地方の運動も影響をうけ、わるくすれば組織瓦解のおそれさえ生じていた。

——私は東京地協内のミミッチイ争いに巻き込まれていない自由な立場から、開催さえ危ぶまれている第五回大会を、京都で引き受けようと思った。そのことで事態を好転させ得ないまでも、冷却させる時間をもつことができるし、地方にいる我々の意向を東京の当事者に反映させられるだろう、と考えた。

しかし京都で大会を引き受けるということは財政的にも、労力からしても、現実には無理であった。当時あるじ無き家Vを経営し、多少は金を出してくれそうな呉世創夫婦なども時期尚早だと強く反対した。しかし、ともかく私は何とかしてやりたいと主張し、会場やその他をあたってみることにした。粟田口の青蓮院の宿坊が、百帖敷の大広間を建てたまま戦争で空屋になったあとを間仕切りして学生などに貸していたが、その一部を大会に借りられる見込みがあった。

二泊三日の予定で、食事は自炊——松田稔夫人と私の妻が当番、米と干物とつけものは龍君が仕入れてくれるという。これで見当がついたので、思いきって大会の引き受けを京都でやると発表したのである。金は、アメリカの同志が度々送ってくれたケヤ物資の中古衣類やカンヅメなどを売却した金二〇〇〇円をもとに、やりくりしてカンパを集めた。支出は、会場費一三〇〇円、食料費、米・干物・つけものなど六八九三円、ふとん借賃二四一〇円、その他雑費六二三〇円であった。

この大会で、山鹿は紛議を予想させる議事を他に集中させる意図もあって、運動方針を「原水爆禁止運動に集中しよう」と提案した。その頃、国内はアメリカ占領軍によって報道が管制されており、ヒロシマ、ナガサキの事情は全く表面からかくされていた。原水禁運動が起こるのは、それから四年

後、ビキニ水爆で第五福竜丸被災があつて以後のことである。その意味では、山鹿のこの提案はきわめて先進的で、占領軍や政府にすくい突きつけるものであった。にもかかわらず、多くの者の認識不足と、ことを構えた対立グループによってその提案否決とともに「自由連合労働組合組織を進駐軍が公認するよう働きかける」が提案された。さすがにそれに対しては、岩佐老人が「権力にこびるアナ運動なんてありえない」と退けることによって、あっさりとおつづられた。

大会はその問題で半日以上を費やし、他の事務処理事項では東京地協の対立がはげしくあらわれて、折角の山鹿の奔走にもかかわらず、ついに日本アナキスト連盟はその大会の後、一〇月になって解散することになってしまったのである。

エス語版『平民新聞』

週刊『平民新聞』が一九四九年八月に一二九号で廃刊した後、編集者として久保譲が広島に寄宿し、その年の一二月から旬刊『平民新聞』（広島平民新聞）が発刊され始めた。もっぱら広島の実原唯一の大きな犠牲によるものであったが、六号（通刊一三五号・五〇年三月二〇日）でとうとう維持しがたくなった。その後久保は岡山に移った。さらに姫路の向井孝、大阪の山口英が編集を継いで岡山の高畑信一と共に、五一年五月の大会まで、通巻一五四号（岡山平民新聞）まで出した。そのうちの二五二号、四号は半月刊で大阪で編集し、また財政的困難を解決するために発行所を大阪に移した。この岡山平民新聞発行にかけられた高畑の献身的努力は、ほとんど自己の資産を喰いつぶして、刀尽き矢折れるまで続いたのだった。

このように日本アナキスト連盟が解散した後も、主として関西・中国・九州の同志によって『平民新聞』発行のための苦闘は、依然として変わることなく続けられたのである。というのは、連盟解散とは言ふものの、実質的には東京地協が解散したにすぎず、それに伴って従来事務局その他が存在した中心部を失いはしたが、地方の協議会、あるいは連盟員自体——特に西日本はそのままだ存在し活動し続けていた。それ故、連盟再発足のための準備委員会は、西日本協議会（中部地方——名古屋をも含んでいた）として何度も開かれた。また山鹿が担当していた国際部も、五一年三月三十一日発行『平民新聞』通巻一五二号にあるごとく、「従来つくっていた平民新聞の海外版エス文ガリ刷りは、印刷不鮮明で読者をなやませていたが、今回在米ロシア亡命同志イエレンスキーからのカンパと、北九州同志の毎月の拠金により、特殊活字を購入し、簡単な活版印刷法を工夫して、今年から鮮明なエス語版を各国に発送している」というふうに、依然として活動し続けていたのである。そして実に『平民新聞』エス語版は、六〇年一月、山鹿がインドへ旅立つ直前まで、連盟機関紙・誌発行ごとに必ず発行され、世界各国に日本の状況を伝えたのであった。

——一九五〇年頃から、私は『平民新聞』の毎号の記事を要約したエス語版（手刷りB5判四頁）を発行し、日本版機関紙と同封で各国の同志と団体に送り続けた。年間平均発送は一般的連絡もふくめ約二千。着信約千通。その送料や用紙代は連盟が出してくれる月額二千円の国際局費のほかカンパ、古切手売却などでまかなった。

このエス語版の印刷方法は、私とくに工夫したものであった。普通欧米文活字はiとmとの厚さが違って一行の終りに差ができ、きちんと同じ幅にそろえるのが面倒であったので、漢字を

組むようにどの字も同じ角の活字をつくった。それをステッキの中で組み、鉄板の組版ゲラの上に置き、木型とクサビでしめつけて、ガリ版用ローラでインクをつける。紙をのせてその上をフェルトをまいた石版用の手ローラを転がして印刷する。この手ローラは木製ローラに上等のフェルトを一巻きして、きちんと縫い合わせると、フェルトの厚みだけ活字面にくいこんで、鮮明に刷れる。活字もいたまない。ただしローラの直径は、太いほどよい。一回転で紙の向う側まで行かないと、紙がねじれてうまく刷れない。B5版の幅なら、石版製版師が使う手ローラで間にあう。

このエス語版は、私が印度へ出発するまで毎号欠かさず発行したが、一九六一年、脳出血で倒れてから、活字もつまえず、重い組版も運べなくなったため、とうとう一九六六年春、いっさいを諦めて縁の下に格納してしまった。

「世界市民」日本登録所

一九五一年（昭和二十六年）六月、準備委員会の手によって再び発足した「アナキスト連盟」（五五年の大会で日本を冠するよう再改称）は、事務局を東京に置き、七月より新しく機関紙『自由共産新聞』を刊行した。これに対して、岩佐老人をはじめ、主として東京在住の年輩者を中心とする人々は「アナキストクラブ」を結成し『無政府主義運動』を出した。ここに新しい二つの歩みが始まった。

月刊『自由共産新聞』は九カ月間つづき、五二年三月の八号まで出した。しかし、分裂して勢力を激減した東京で、その編集発行を支えきけることは難しいことであつた。五二年五月三、四日、大阪で

開かれた第二回大会は、その廃刊を決め、すでに五一年一月より九州飯塚からガリ版によって刊行されていた旬刊『平民新聞』（九州平民新聞）を引き継いで、これを「中央版」として発行することが決められた。

これについて五月二五日付『平民新聞』関西版第一号は、「大衆運動の中に闘争展開を決意」「紙の弾丸を、月三回発行体勢確立」として、「両日とも午前十時から午後六時まで、関西総局事務所（戦災後まだ修復されていない高津小学校の三階の一室を使用していた）で開かれ、事務・編集・国際各局の報告、各地協現況報告があり、連盟結成以来六カ月の運動の成果について質疑及び批判が行われた。……この不活発の原因は思想の実践と展開における活動意欲の不足以外なら理由は見出せず、……今後、大衆運動の中への展開という第一回大会の申し合わせ事項を再確認した。出版活動については、一部同志に一切の負担を負わせてこと足りるとする従来のそれを変更し、各地協員が自己の可能な範囲で、極力出版機関をもつようにつとめ、連盟機関紙も月刊『自由共産新聞』を廃し、ガリ版旬刊『平民新聞』中央版として、従来の欠陥を克服することに決定した」とある。

この『自由共産新聞』から『平民新聞』中央版への移行は、月一回から月三回発行による活動の積極化ということ共に、ほとんど杉藤二郎個人（協力者として副島辰巳、井原末九郎）の手で出されていた『九州平民新聞』が、三月に三種認可を取っており、郵送費が大きく軽減されるという点に第一の理由があった。『中央版』はまず五月二五日に「号外」を出し、続いて六月五日に第一八号が、六月一日には第一九号と刊行がはじまった。

また、各地協での自主出版という大会決定に基づき、この『中央版』の三種利用を拡大して九州地

協と阪神地協は、その「付録」あるいは「九州版」や「関西版」と名付けたニュース、パンフ代わりに評論掲載号を作り、『中央版』とともに発送するというのもやりだした。しかしこの旬刊『中央版』もまた五カ月あまり、三二号で停止することになった。

この前後、山鹿は原稿不足を訴える『平民新聞』に、きわめて精力的に記事を送っている。山鹿にとっても恐らく、生涯でもっとも多く執筆している時期であった。またそれらの記事の他に、毎号「世界市民運動ニュース」の欄を作っている。これら山鹿の記事の多くは、海外の評論やニュースの翻訳であるが、それは単に物めずらしいものを紹介しようというのではなく、いずれも山鹿が自ら語り書こうとする、そして山鹿の意見そのものといってよい内容であった。

山鹿が、この頃の自己の活動の中心においた「世界市民運動」というのは、後の「戦争抵抗者インター・WRI」の運動と共に、彼がアナキズムを現実の大衆運動の中へ発展させようとしたものとして、またきわめて切実に関係しようとした点で、晩年の山鹿の思想を知るためには見逃しがたいものである。

そして山鹿は、パリと連絡してこの世界市民の日本における登録所を受け持ち、その宣伝のためにピラを作り、ニュースを出し、日本部の機関紙『世界市民』を四号発行した。この運動は、一時の世界の拡大昂揚の後、主唱者ゲリー・デビスの引退などによって、約一〇年でほとんど動きをみせなくなり、山鹿の活動もみられなくなったが、彼個人の胸裡に刻み込まれた世界市民意識は、自己の生き方と立場そのものとして何時までも残ることとなった。一九五八年八月に彼が書いた「世界市民の空想と現実」はそれをよく示している。

——明治天皇の手下どもに縊り殺されたアナキストの一人、可愛い顔をした古河力作はその書き残した「僕」という一文の中に「世界が一国となり、一家族となり、何処に至るも帰宅するの必要なく、わが家なく、家庭なく、親子兄弟も他人の如くして他人ならず……」と、国と家を否定した。

ゲリー・デビスがパリで一九四八年一月「世界市民第一号」の宣言を発表したのは、過去の多くの世界主義者の指向した焦点を具体化したものであった。……ゲリーはヤンキー軍人出だから、エス語を学ぼうともしないで、もっぱら世界市民の事業として世界市民党を作ったり、世界旅券を発行して各国政府に承認せよと迫ったり、将来は世界通貨を発行する計画などを考えている。一方パリの世界市民登録所は、申込者に登録カードを発行するのに多忙をきわめているが、日数もかかるし、商売にもならぬ仕事だ。カードが何の役にたつかというと、旅券の代用にして身柄を証明して国境を通ったという実例も少しはあったが、よほど気のきいた税関吏でないと通すまい。僕はアメリカ銀行の大阪支店へ小切手の換金にいったとき、カードを出して身分証明にしたが、ヤンキーの行員はフンと鼻であしらって相手にしなかった……。

平和と文化のために国家の主権を放棄してもよいと考えている人民があるのに、多数の国ではまだ民族主義、反植民地主義をかざして先進国と闘争しなければならぬ新興国家がある。それが事実だから仕方ないが、次にくる資本主義や全体主義の搾取は、植民地的掠奪にもまさる経済的圧迫だから、決してプロレタリアの解放にはならない。民族の解放が同時に階級の解放まで完了したら幸いだが、歴史上はそんな例はなかった。それで、百年も前にその歴史過程を終った国

と、つい戦後やっとその過程を始めた国々との間の差は、一応人民が国家に所属する国民という名をかなぐり棄てて、世界人の一人すなわち世界市民たるべき欲求を持つことよってのみ、歴史過程を短縮することができる……。

世界市民運動は個人の自覚を強化することが根本の眼目だ。その自覚した個人が集まって世界的規模の事業を組織することは、将来の世界人民会議（百万人の住民から一人の委員を選出）で討論される第二段階のことである。……人類世界の幸福のために献身的努力を惜しまない精神は、今日の時代に於て世界市民の自覚を表明し、他人にまかせず自らこの大団結に参加する決心からはじまるだろう。

そして言うまでもなく、山鹿における世界市民運動の特色は、世界市民とエスペラントの一体化であった。

連盟代表として

この一九五二年（昭和二十七年）五月、大阪でひらかれたアナキスト連盟第二回大会で山鹿は連盟代表に選出された。もともと連盟の代表はただ対外的な必要からの、名称だけにすぎぬものではあったが、運動が紆余曲折していよいよ先細りの感がする時期に、あえてそれを引き受けた彼の心境には、なみなみならぬものがあったに相違ない。その想いを秘めて、すでにこの年六〇歳になった彼は、一方では便利堂で働きながら、そのあらゆる余暇を国際部の仕事に打ち込んでいたのである。

さて五二年一〇月一八、一九日、初め東京で、引き続いて西下して大阪でひらかれた全国代表者会

議は、旬刊『平民新聞』中央版の廃止を決めた。それは、東京編集局の山口健二、植村諦が必死になって月三回発行を維持した大きな努力にもかかわらず、「……運動が不活発な現在、具体的闘争ニュースなど記事に盛り得ない。連盟内の思想的な統一への努力が欠けているため、編集上の一貫した明確な立場に立ちえない。地協によって運動上の主点、対象が異っているなどの為、形式内容とも中途半端で、大衆宣伝紙にも理論紙にもならず、原稿の集まりが極度に悪いこともあって、結果的に完全な失敗であった（報告）。そして、「従来の平民新聞は、これを全国的機関雑誌『アナキズム』と発展変化させる。型式は、B5判四〇頁、月一回、部数三百部」の発刊を決定したのであった。それは「新聞では深く突っ込めない問題を、理論的に究明し、運動を深化発展させるための理論及び討論の必要に迫られている」という現状認識に基づいて、編集局は植村諦、山口健二、その発行経費月額一万四千五百円は各地協の分担というものであった。（九州地協がうち一万円、といっても副島・井原らの大きな個人的拠出に依っていた）

この財政負担にみるごとく、地協という名前があってもその名実として最低月一回の会合を持っていたのは、せいぜい阪神と東京、名古屋ぐらいであった。登録された連盟員は百をこえていたが、そのほとんどが有名無実化し、連絡さえ来ないのが多かった。連盟は十指で数えれば足りるほどの人たちの手で、まさに消えようとする灯を必死に守っているという戦後最悪の組織状況であった。連盟としての名目は、機関紙をのぞいて、山鹿の担当する国際局の不变不絶の活動によってわずかに支えられているにすぎなかった。そして「一たびアナキストとなり、運動を志し、アナキズム革命社会建設を目指したわれわれが、今、ここで最大の努力を怠けサボったなら、われわれの生命は失われたに等

しく、再び日本にアナキズムの花は咲かないでしょう！ われわれの怠惰を正當化する理由は、今一切失われています。新聞を発行し雑誌を出し、そのために投稿し資金を送り、これを大衆の中へバラまく。滲透させる……このことだけでも今から、怠けず確実にやってゆこう」という訴えは、論議をただ雑誌発行一本にしぼり、内部を固めねばならない当時の実情を示したものであった。

このようにして、その年一二月より理論誌『アナキズム』が刊行されることになった。また、阪神地協は『平民新聞』関西版に代って『自由市民』タブ二頁を出し始めると共に、『九州平民新聞』も復活した。『自由市民』は、はじめガリ版で二回出され、五三年五月の大会以降から活版となって本格的に出されることになるが、『九州平民新聞』は再び『中央版』を引き継いだ形となって三四号から発行されだした。

戦争抵抗者インターへの加盟

一九五二年一二月より刊行された理論と討論の機関誌『アナキズム』は、月刊として発行された。そして三号位からようやく討論らしいものが生まれ、内容を整え始めてきた。五三年四月一〇日発行第四号の目次をあげてみるならば、

論文 石よ何故かとばざらん——政党政治の腐敗

アナキストは政治と選挙をこう考える

再軍備か否かの岐路に立って

連盟の組織活動について

国家論（連載）二

スペイン革命史（つ）四

討論

平和は平和的手段によってのみもたらされる

原子力時代とアナキズム革命・山鹿泰治

（これは三号論文の「今のままでは平和運動は阿片とならぬか」への反対論文である）

この他に投書欄「何故アナキズム運動は低調となったのか」他二篇、および毎号山鹿によって書かれた「国際戦線ニュース」三頁である。この様に外部向けと内部向けのものとがやや混淆しながらも、ようやく当初の目的、方向を編集の上に表わし始めることになると共に、かすかながらも討論が出てくる程に、内部が僅かに動き出したということでもあった。

しかしなお一九五三年五月二四日、神戸において開かれた全国大会は、東京からは事務局担当の山口健二のみ、他に名古屋より一名、それ以外に京阪神の山鹿はか一三名というかってない沈滞状況であった。この大会は、『アナキズム』誌の外に財政的な苦難をあげてして、更に『リベルテ』誌の発刊、阪神地協は『自由市民』の地協独自の宣伝紙としての刊行を決定した。それは『アナキズム』誌をもっぱら連盟内の討論学習誌とすることによって生ずる欠落を、対外的な思想文化誌『リベルテ』によって補うこと、『自由市民』は一面では杉藤の交通事故などで休刊に至った『九州平民新聞』に代わるもの、ということでもあった。

山鹿はこの大会で、戦争抵抗者インターナショナル・WRIへの加盟についての提案を行なった。それはその年の二月発行の『アナキズム』三号に掲載した「WRIより日本のアナキスト同志に呼び

かける」によって、その書記アルロ・タトゥムが申し入れて来たことに端を発していたことがわかる。山鹿にとってWRIは、まず第一に何よりもWRIが公用語としてエスペラントを採用していることが大きく気に入るところであった。

——略称WRIという世界的抗戦組織は、第一次大戦直後、ヨーロッパ各国で戦時中反戦運動のために迫害された人々がオランダで会合したことから始まった。強力な抗戦者の組織を作ることになり、イギリスからきたランハム・ブラウンが主力となって仮称「パーツォ」(エス語で平和)という国際組織を作った。その書記になったブラウンは、当時四二歳、すでに二〇歳の時イギリスの南ア戦争に反対して闘い、大戦中は投獄された獄中で秘密の回覧新聞を作り、反戦思想の宣伝に務めた人である。一九二五年に始めて世界各地から九〇名の代表が出席して評議員会が選出された。その後三年毎に各地で国際会議が開かれ、機関紙『戦争抵抗者』を年四回、英・仏・エス語版で出した。ロンドンの本部には六〇人の翻訳者が一四の言語を用いて会員との通信に働き、各国へ常に情報と連絡を送る。その密接な連絡網によって事変が起こった場合は、敏速な共同行動を呼びかけると共に、活動者を送ったりする。

このWRIの見解と定めを要約すると――

1、どのような戦争をも支持しない。会員は、軍隊のどの部署にもつかない。兵器や戦争用資材を製造したり、取り扱う職業につかない。また国家の戦争遂行に直接・間接に役立ったり、助けることの一切を拒否する。戦争や兵役から自由になろうと望む人を助け、その行為の達成に協力する。

2、非暴力主義を実践する。暴力は秩序を保証しない。それによる勝利は、人民の解放に役立たず、個人の自由を守らない。

3、WRIは、戦争原因の除去のために闘う。戦争は、互いに競争的な経済組織や階級・人種・宗教・イデオロギー・差別、そしてとくに国家についてのあやまった一般の観念が原因となっている。たんに戦争を否定するのではなく、原因となっている根源と闘い、相互扶助の共同社会をつくり出すことによってのみ、戦争は消滅する。

4、インターの任務は、いろいろな方法で、戦争抵抗運動を助けることである。さまざまな国家に分断されている組織と運動に接触し、情報を送り、記録をうけとって集約し、その連帯に役立つことである。兵役忌避や戦争抵抗者の投獄・監禁・処刑・追放に救援の手をさしのべ自由を回復させることである。そのため書記局は、各国組織へニュースを送り、会議、キャンペーン、直接行動の組織、非暴力訓練セミナーを実施する。

5、WRIの力は、自覚した個人が独立して闘う、その個人の力のうちにある。

もちろんそれは全世界でそれぞれ闘う個人と連帯し、インターとして連合されるものである。それゆえ加盟は個人の良心と責任において、インターの宣言を認め、会費千円または一ポンド(年額)を連絡通信費として負担するだけで、それ以上の責任も義務もない。但し、とくに1・2項について自己がそれに反する行為をとっていると認めた時、自動的に会員の資格を失うことになる。また組織や団体が、多数決でWRIに加盟することはできない。

大会で加盟することは承認されたが、問題は非暴力主義ということと団体加盟でなく個人加盟とい

うことにあった。このことに関し、五四年本部よりアルフレッド・タッカーが東京の原水禁大会出席をかねて来日、個人加盟の便法として各地協代表がサインすることでそれを認めることとなり、五四年になってアナ連構成員は全員がその会員となった。しかし非暴力の問題はそのままあいまいな形で見逃された。また代表者のサインということで、連盟員個人の自覚は人によっては稀薄なま一九六〇年大会において紛議を起こすこととなった。

『アナキズム』第七号

——若者たちと老人たち——

一九五〇年から五五年にかけ組織的にアナ連が最沈滞状況にあった時期は、一方において朝鮮戦争による日米支配層の結合強化、レッド・ページ、再軍備の発足、国土の軍事基地化、追放解除と財閥の復活、破防法の公布などというふうには、日本帝国主義が昔日の力をとりもどす体勢を作り上げていく一方、メーデー事件、火災ビン闘争、内灘闘争、そしてビキニ水爆による原水禁などの運動が盛り上がりへと向う時期と対応していた。そしてそれらの激しい波瀾の動きは、当然またアナ連に属する各個人のものであったにもかかわらず、連盟の組織はほとんど名目と化し僅かに機関誌発行のみという活動の状況は、阪神地協のとくに若手層の活動的であろうとする人々に、危機感をもって迫るものであった。

一九五三年一〇月神戸海員会館で開かれた全国代表者会議は、このような危機感を孕みながら、参加者は東京より近藤憲二、山口健二、九州より井原末九郎、残りは京阪神を合わせて一五名という、依

然として沈滞を抜け出るものではなかった。それより先の七月、事務局（山口、井上）編集局（植村、山口）よりお願いの文書が出されていた。それは「事務・編集局を阪神地協へ移してもらえまいか」として、理由に「東京地協の崩壊と再建の早急な見通しが立たぬため、著しい人手不足。殆ど一人か二人で、事務・編集の一切をやらねばならぬ事情。これでは十分なこととは出来ぬどころか、組織上から言っても変則的でまずいこと、阪神地協は最近新しい連盟員が増え、結束もかたく、全国の組織中で最も活発であり、人手も多いこと、今の編集局（特に山口）はここ三年以上も編集をやっており、一人の者が永年やっておれば停滞が生まれがちで、新しい方向や発展が生まれにくい」というものであった。会議はこの提案を討議した結果、東京で出すものより、内容の良いものが出来るかどうかは分からないが、編集発行の条件としてはよりよいことも明らかなので、それを阪神地協に移すことが決定し、編集に山口英、事務局に福井陽三が当たることになった。

ところでこの全代会議は山口英から提出された「アナキスト連盟の組織の改革（再認識）」と当面の運動について」をめぐって、はからずも根本的な組織論、ひいては各人のアナキズム思想の捉え方、その運動観についての討議が展開されることになった。提案の趣旨は次のようなものである。

——われわれはそれを実現する方法論をもたぬ誇大な、当面の「行動綱領」をもち、実行もされない完璧の規約をもっている。全国に点々とするわずかな連盟員。名前だけつらねている正式連盟員や、連盟員なのか連盟員でないのか分からない責任もない少数のシンパ。出会えば話もし、すこしの金は出してくれる程度の少数の古いアナキスト。加盟したと思ったらすぐ脱退する若い人たち。こういう人たちをかかえて連盟の地協組織は現在ではもはや壊滅したにひとしい。あるの

は一部の人たちの個人的活動だけである。では一体なにがあるのか。機関誌『アナキズム』の不定期刊行と、各地の計画的でないゆきあたりばったりの少数のおざなり集会だけである……。

われわれは思想サークルにすぎないのに、もっと大きなことを考え、サークルを越えた組織の運動方法と形態をとり、いたずらに空転してきた。サークルであるのにサークルとしての方針と行動をもちえなかった。連盟でないのに連盟のような方針と行動をもとうとした。ここに無限縮小の根本的原因があり、連盟という組織を考えなおしてみる理由がある。

連盟が思想サークルにすぎないなら、連盟をそのように改組しよう。このことは今ある連盟をたたきこわせということでは決してない。現実には連盟はそうになっているのだから、この事実を確認し、形態と、われわれ自身の意識をそれに密着させようということだけのことである。まず第一にこの事実を確認すること、第二にこの事実をしっかりと踏まえてどの方向にきりこんでゆくべきかを見極めるということ、第三にはその方向についての具体的方法を考え、そして全連盟員が全力を集中して奮闘努力することを約束しあうことを意味する。

われわれにとって今一番大切なことは……早急に各地で、手のつけられるところから、二人でも三人でもいいから思想研究サークルを結成すること……。連盟はそれらのサークルへの助言と援助、経験の交換、資料の提供といった、個々のサークルで背負いきれないような性質の仕事をやっていく。機関誌（紙）はこの目的にそうよう編集されなければならない。われわれ、特に次代をになう青年同志諸君のアナキズムに対する理解は貧弱であり、研究学習はほとんどなおざりにされている。われわれ自身の高まりのないうちに、どうして運動の拡がりが成し遂げられよ

う。この際われわれの位置は単なる思想サークルにすぎないということを胆に命じて、そこから再出発しなければならない。

連盟を改組して思想研究サークルの連合体にすること、全ての連盟員は率先して思想サークルを結成あるいは加入すること。加入者の資格を制限せず誰でも加入できるようにすること。機関誌はそれを援助するような編集方針をたてること。現在の綱領や規約は廃棄すること。新しい連合体の目的はアナキズムの思想の研究と普及であり、アナキストの養成に限ること。なぜ限るか。それは全力をそこに集中するためである。

この提案は、全国の組織中で最も活発と東京事務局がみている阪神地協が、「新しく入ってきた青年たちが、連盟に加盟することによって却て失望し、脱退していく」という現実と、今のままではどうにもならない運動の行き詰まり、自己の無能力へのいらだち、その苦悩をも表現したものであった。それ故当然のこととして、活動しようとする青年層の一般的な声を代弁していた。しかし歴史的に戦前のアナキズム運動を経験した世代の人々にとって、かつて存在することのなかった「連盟」の存在と維持は、ほとんど絶対的な意味と、そして守らねばならぬ一線としてのアナキズムそのものを意味するものであった。

この提案の賛成的意見の代表的なものとして山口健二は、さらに敷衍して「サークル組織としての活動と共に、大衆組織のなかのフラクション活動に集中すべき」ことを主張し、崎本正は、「研究会の具体的方法と、その目的・問題点」について実践方法を述べた。

一方それに対して、久保譲、井原末九郎らから、「実体はその通りだが、連盟活動の条件や分野は

失われてはいない。やるべきことをやらないわれわれの努力が足りないものであって、ここで連盟を思想研究会などという名称に変えてしまうことには不賛成だ。他の政治的大衆団体に入りこむということも、やるものがやればよく集中してみながやるのには反対」との発言があった。

また近藤憲二、山鹿泰治、竜武一郎、福井陽三らは、「連盟がサークル程度の実態しかないことは事実だが、これを全くないものとして考えるのは誤まりである。非常に少ないが僅かながら同志的結合はある。これを中心にしてゆくことを考えるべきだ」というように意見がいくつかに分かれた。結局、連盟員間に広く討論を起こすために『アナキズム』誌にそれを掲載し再検討するということが決定された。

当日の席上、山鹿はほとんど発言せず、ただ近藤憲二の意見に賛成しただけであったが、『アナキズム』七号に次の文章を寄せた。

——戦後日本では、一時的に解放された言論自由の風潮に乗って、はじめて公然のアナキストの全国組織ができた。……一団体、一社会が能率的に発展していくために最少限度の個人負担はやむをえないが、例えば、党の指令を履行しなかったら罰せられるというような組織は、ほとんど資本主義の雇用制度以上の搾取である……。自由連合とは、社会的個人主義の自覚をもつ個人が最少単位（細胞）を形成し、その単位が周囲の単位と連合して地域および職域の連合を形成し、世界の連帯が成立することである……。

この概念をよく理解したならば、団体の事業が、周囲の社会状況のために消長があっても何も一々焦燥するに及ばない。今日世界的反動期のために政治党派の運動のみが発展し、アナキスト

連盟の反政治運動が進展できない事情にあるのは少しも不思議はない。これを気に病んで、新同志獲得のために、完全な組織で立派な門戸を構えていなければ連盟と名付けられないという一種のミエは無用である。

一小サークルの思想研究会というような連帯責任感の稀薄な一時的集合体は、局部的な対処工作に有用であっても、真の連係においては甚だ不利である。ことに今日ではアナキスト・インターナショナルがあり、日本のアナ連も加盟し、各国の同志と連盟がそれを重視し、大いに希望を囑している。その存在は最後の一人になっても、権力の圧迫でぶちこわされない以上、断乎として守るべきものである。その名が実に伴わぬというなら一人でも多く同志を獲得すべく、実状をかくさずに告げ、奮起をうながすべきである。政治的な景気の良い運動に幻惑されて道を誤らないように希望する。

なお『アナキズム』誌はこの第七号（五三年二月）から編集が大阪に移り、組織問題特集として一九名が意見を発表している。続く五四年一月の八号では九人の発言が載り、二月の九号では五人……と続いていく。

このように『アナキズム』は二年後の五五年七月、二四号で廃刊するまで、今から言えば幾つかの主要な問題を次々に討論する場所となることで、はからずも少数の散在孤立した連盟員と、地協の存在する地区の連盟員とを結びつけ、時には熱い同志的息吹きを伝えながら、運動の大きな軸としての役割を果たすものとなった。

アナ連第四回大会以降

一九五四年（昭和二十九年）山鹿は便利堂印刷所を停年退職したのを機に、京都生活をやめ、東京へ引越すことにした。妻の妹婿になっている島津末二郎の好意で、その隣にある一五坪ばかりの空地を借り受け、小さな家建てた。もちろん山鹿の設計で、建築費は全部で二〇万円ほどであった。その僅かな費用からでも想像できる中山の家は、彼の理想とする簡易生活を象徴しながら、しかし構造的にも機能的にもよく計算された、山鹿自慢のものであった。

こうして山鹿の、東京での生活がはじまったが、それはアナ連東京地協に新しい活気を吹きこむことにつながった。例えば、五四年四月一〇、一一日、静岡県大瀬で開かれたアナ連第四回大会における東京地協報告は、「毎月例会を開いているが、今年二月京都より山鹿が来たことが、地協活動活性化の契機となった。例会にも次第に人が集まるようになった……」とある。

このアナ連大会の開催地が大瀬岬となった経緯は、もっぱら山鹿の世話によるものであった。昨年来の連盟組織に関する討議は、連盟の実体を明らかにし危機感を意識化させたことにおいて、小数はあったが連盟員の自覚と活発化をよんだのは、間違いのないところだった。しかし討論は『アナキズム』誌上だけではなかなか焦点を明らかにし得ず、尻切れトンボの感があった。「今までの大会は余裕をもってみんなが話しあう時間も機会も作られなかったということが言える。誌上に原稿を並べるといっただけでは、反論もうやむやになり、充分な意見の交換はできない。もっと時間をかけて心ゆくまで話し合う事が絶対必要だ。そこで今年の大会は、宿所に心配せず、一緒に泊まり込んでゆっく

り時間をかけ、多くの人が意見を発表できる方法をとりたい」（連盟ニュース）ということから、山鹿は、適当な開催場所をあたったのである。そして沼津から船で一時間、富士の美しい大瀬岬の、Y氏経営の旅館を、シーズンオフなので無償で提供して貰えることになったのだった。そして、大会参加者の案内、受け入れ、送り出し、会場設営などの一切の手配を、山鹿はまるで何でもなしのようにやってのけたのであった。

さて第四回大会は、たまたま亡命ブルガリア・アナキスト・ユニオンから送られてきた「世界のリベルテール運動のイデオロギー的、戦術的ならびに組織の方針についてのアンケート」——アナキズム誌九号に掲載された一七項目にわたるその見解に対しての質問を、「連盟組織」の討論のより拡大深化したものとして捉え、大会での議題とすべく一〇号、一一号はそれに答える各人のアンケートを載せていた。また阪神地協ではこのアンケートに答えるための討論を行い、さらに大会用討議資料として久保譲のまとめと執筆による「社会理論としての自由共産主義」とマキシモフ「革命的転換期におけるアナキストの建設構想」の二論文を、『リベルテ』一一号に掲載、大会テキスト冊子として発行した。前者の論文は、ブルガリア・ユニオンにも共通するものであったが、「社会革命理論としてのアナキズムは、バクーニンの時代における第一インテラーの中において形成され、階級闘争の中から生まれたものである。そして連盟もまた革命的プロレタリアの前衛の役割をもつ」というところから出発していることにその特色があった。これは戦前におけるいわゆる純正アナが、階級闘争と言うだけでボルの手先のように攻撃した歴史にみられる如く、さまざまな傾向と見解が存在する連盟の性格からすれば、テキストとはいえ容易ならぬ議題でもあった。

数年ぶりに参加者もふえ、やや活気を呈した大会は、日程の中心に「アナキズムに対する基本的態度の確立について」の討論を据え、テキストをめぐって論議が行われた。「討議は、まれにみる熱心さで行われた……」。テキストはアナキズムの新しい一理論として提示されたものだが、内容の多少の矛盾は一応よしとしても、方法を確立するに急で、自由と権力の本質及び作用を追求することがなされてない。自由、秩序、組織、権力、この連関を究明することがアナキズムを深め、同時に具体的、現実的になりうると考えている私には、多少的はずれの感を抱かせた。意見の違う処は違う処とはっきりした上で、連盟の性格の幅の限界を設定し、その枠内での統一の見解を設定することが望ましいと考えていた私には、満腹感が薄い……」という副島辰己の大会感想は、また山鹿の言わんとするところでもあっただろう。そして問題があまりにも大きく深いために、討論は、激しい対立から分裂へと進むことを恐れる部分の憚りと、ある意味での思想の未熟性とが絡みあって、明確な成果をあげることなく終ることになった。それと共に、前年から引き続く組織問題も、なんととはなしに棚上げされ、流動する国内情勢に対して当面の運動をどうすべきかといった問題が、強く出て来ることになるのである。

× × ×

さて、山鹿の活動を連盟の動きに即して書き連ねていくならば、それは戦後のアナキズム運動史あるいは連盟史を語ることにまなろう。

そして五五年以降、たとえば国外ではハンガリア革命、人民公社の出現といった世界的激動、一方国内では、六〇年安保という動乱期を迎え、原水禁運動の昂揚とやがての頽廢、労働運動の戦闘化、

三池炭坑争議や大正行動隊、安保闘争における六月行動委や声なき声の会の発足といった一般的動きの中で、連盟もまた反戦平和と労働運動への集中した闘いを、さまざまな試行と苦悶の中で、当然示し始めることとなる。しかしそれらを一々書くならば、限られた紙数をはるかに超えても尚及ばないということになるだろう。ここでは、それらを省略して、ただ山鹿がその期間どのように動いたかを推察する資料として、六〇年までの連盟の主要な動きを列記するだけに留めて先を急ぎたい。

一九五五年（昭和三〇年）

連盟事務局の東京移転。責任者大沢正道となる。

『国際ニュース』の発行。

「二つのアナキスト・インターに対する連盟の態度問題」討論と決定。

「亡命ブルガリア・アナキスト連盟国際連絡委」よりの回答。

『ヒロバ』——15号より『無政府研究』18号より『アナキズム』と改題、一九六二年八月二〇号まで刊行。

一九五六年（昭和三十一年）

連盟パンフ『労働者諸君に訴う』発行。メーデー会場などでの宣伝販売活動。

「国際アナキスト大会」についての連盟の見解と回答、砂川基地闘争と連盟「声明」。

アメリカWRI会員J・リーヴスの来日。

機関紙月刊『クロハタ』の発行。——七八号より『自由連合』と改題。

連盟パンフ『労働者の次の歩み』サンソム刊行。

一九五七年（昭和三二年）

「一つの問題提起」をめぐっての討論。

亡命スペイン人同志G・グラシヤの来日。

WRIによる反戦運動の展開、ビラ六万枚の配布。

原水爆禁止大会へ、山鹿WRI日本部代表として参加。

第七回大会決定による「連盟員のエス語学習運動」。

エス文パンフ『幸徳と大杉』の発行。海外への配布。

連盟パンフ『ハンガリア問題』刊行。

一九五八年（昭和三三年）

原水禁第一回平和行進に、WRIより竜武一郎を派遣。各地協行進参加。

第八回連盟大会で「各地協の原水協加盟と活動」を決定。

同「WRI国際大会」代表派遣を決定。

同「平和運動方針案」審議をめぐって、平和共存論および従属論について論議。

一九五九年（昭和三四年）

連盟ビラ三万・WRIビラ三万枚を新たに作製、配布。

安保改訂阻止闘争。

中小企業労働者組織問題と合同労組論。

一九六〇年（昭和三五年）

連盟労働運動協議会発足、『労働運動』の発刊。

『スペイン革命の教えるもの』刊行。

大逆事件再審請求に伴う「真実を明らかにする会」への協力。

連盟ビラ「国会を包囲し、坐りこめ」発行。

第一〇回連盟大会で「平和運動方針をめぐって、WRIへの連盟員一括加盟を中止、自主再登録」を決定。

山鹿・大道寺、WRI国際大会参加のため印度へ出発。

.....

なおこの期間、何度かとだえつつ『連盟ニュース』が発行されたが、それへの山鹿の精力的な執筆は運動に大きな影響を与えたものとして特記されねばならない。

病中記

山鹿は永年、ときどき起こる胃の痛みと心臓発作に悩んでいたが、一九五六年一月に順天堂病院に入院して、胃の手術を受けることになった。

——大杉がよく人に「京都へ行けばうまいパンが喰える」と言うのと、皆が不思議に思っていた。それは僕が紹介したシンパの続木君の進々堂パン店によくコッソリ泊まったからだ。昭和の初め僕も進々堂支店の京大裏の喫茶店「ノートル・パン・コティデアン」（われらの日々の糧）という店を開店する時、バーテンダーとして働いた。コーヒー一杯五銭で、およそ二万杯を京大生に飲ま

せ、その間、僕は毎日自分の作るのを試飲せねばならず、ついに胃袋は散々荒れ、それが元で慢性胃酸過多になってしまった。

大杉は殺され続木は肺で死んだ。僕はオメオメ生きのびてきた。痛む胃袋と共に台湾や比島をさすらい、敗戦後京都へ帰って立命館のエス語夏季講習に、二週間ぶっ通しで毎日二時間、広い教室で八〇人に届くようにと声を張りあげた。元来のダミ声ときているので僕には骨が折れた。果然、強い発声の振動で心臓の雑作がガタついたらしく狭心症が発作した。その後は胃と心臓と二重の痛みに苦しんできた。

レントゲンの影は胃潰瘍が進みガンの一歩手前で、すぐ切らなければ死は時間の問題という。停年退職で失業以来、時間の自由は得たが入院費を得る途がなく、同志諸兄の温い救援の手と配慮を受けた。名医の執刀の下に全身麻酔されて、知らぬ間に臍から上へ一〇センチ切り開いて胃腸を全部引っ張り出しておののちの大手入れのあげく、肥大した幽門から噴門近くまで両手程の胃壁の潰瘍が切除されて、ビルロート第二法とかによって縫い合わされた。その熟練ぶりは、手術を見学した人の話では、実に巧妙で女も及ばぬ針運びだったそうだ。気がついたら元のベットのの上だった。「痛い痛い」と二日間うなる間に輸血、リンゲル、胃液を鼻からゴム管で吸い取るポンプ、鎮痛モヒ等々あらゆる医療の粋がつくされて四日目にガスが出ると流動食が喉を通った。

僕にしのび寄った「病魔の手」はみごとに払いのけられた。手術前に同志たちは、その医師を呼んで念を押して万一の懸念を確かめたが、医師は生命を確認したので決行されたのだそうだ。でも僕は全身麻酔の経験が無かったので身辺の整理と、目下協力進行中の外国同志との仕事も処

置しておいた。

奇しくも退院する日、それは二月一八日午後一時、正にその時刻は神田教育会館で幸徳秋水大逆事件記念講演会の開会時間だった。かくて再び僕は幸徳等と一歩の所で冥土で会いそこなった。

明治四四一月二四日一二人のアナキスト男女が天皇の名によって絞め殺された。これに目ざめて僕は神とキリストに別れて、決然アナキストの道に従ってきた。あれから四五年目に、また僕は幸徳等に出会いそこなったことになる。余命はもちろんクロハタの下に誓死する。

この手術で、山鹿の胃は五分の二になったが三月一〇日の『連盟通信』六号は、いかにも山鹿らしいその後の様子を伝えている。「山鹿泰治氏は去る二月一八日退院、自宅で静養している。といっても、じっとしてられない山鹿氏のこと、もうタイプを打ったり、活字を買いに出歩いたり、退院一週間目には、遠い雪ヶ谷まで近藤氏を訪問し、みんなをハラハラさせている……。」

インド紀行

一九五八年（昭和三十三年）のアナ連大会に、国際局はWRI大会代表派遣の件を提案し、その派遣準備委員会が設けられた。準備委は代表を送るため内外の関心を高める啓蒙活動を行うと共に、旅費調達の方策・研究・カンパ方法を考えることとなった。それはさらに一九五九年大会で具体的に検討され、カンパ活動が積極的に始まったが、連盟の力量では当初四人程度という目標は大きくはずれ、一人二〇万円の旅費、そしてそれすらも危ないというような状態であった。

一方、山鹿からは不足分は自分で調達してでも行くという意向が強く述べられ、大会は山鹿の熱意

に押された形で彼を代表に選出したのであった。しかし六八歳という老齢に加えて病弱な点でいろいろと心配する声が出た。そこへ埼玉の大道寺三郎から私費で同行したいという申し出があり、彼を万一のときの介添ということで本決まりになったのであった。以下、山鹿の足取りを追ってみよう。

——一九六〇年一二月にインド・ガンジーグラムで戦争抵抗者インターナショナル・WRIの第一〇回国際大会が開かれることになった。初めてアジアで開かれる大会だから、ぜひ日本から来てもらいたい、との要請である。

私は、五九年の日本アナキスト連盟の大会で——アナ連は五四年の大会でWRIへの連盟員全員の加盟を決定したことがあり、是が非でも出席しないわけにはいかない。私も従来成り行きと責任から、行かせてもらいたい、と申し出た。しかし船で行くとしても往復三〇万円はかかりそうだ。コロンボまで船で行き、鉄道でセイロン島北端へ出て、そこから海峡を渡ってインドに上陸、汽車で目的地へ行くという最短コースを考えたが、セイロンを通じてインドへ入る人は少ないらしく、案内所で聞いても詳しく分からなかった。また私が老年であるところから、大会でもいろいろ問題があったが、大道寺三郎が自費で同行することが決まってしまうやうやく決定、それから、同志とエスペラント仲間旅費カンパが行われ始めた。私も旅費の一部と考えて、師復からもらった揮毫の扇子を売却した。

一九六〇年の春頃から外務省へ日参したが、いっこうに返事がない。調べてみると、山鹿は昔、要視察人だったということで、旅券係が握りつぶしていた。何度も催促すると、「あなたは

アナキストだそうですね。インドでアナキズムの運動をされると困るのですが……」ときた。「私はアナキストだ。それと同じようにエスペランティストだ。そして、平和主義者だ。今度インドへ行くのは、WRIの大会、すなわち平和運動のためである。あなたは、平和に反対ではないでしょう」ということで、やっと九月末に皮表紙の日本国旅券三四八三三二号が渡された。

旅装は大トランク一、毛布、折りたたみマット、トランジスター、空気枕、その他小トランクに身のまわり品一式。写真は高くつくからスケッチ帳と色鉛筆。雨具はビニール布で代用。梅ぼしはおかずのない時大いに助かった。ハサミも珍しがられ、女の人に喜ばれた。昔の穴あき銭や、銀杏の葉、朝顔の種子もめずらしいお土産になった。さて、インドのガンジーグラムはどの辺かと問い合わせたら、鉄道地図の付図に目印しをつけて送ってくれた。それで、目的地は、南インドのマドラス州の DANDIGUL で乗り換え、二つ目のアムバトウライ駅に下車して一キロ位の新開地と分かった。もちろんそんな小さな村だから地図にも出ていない。

一月六日出帆。八日夕方沖繩を通過、夜から中国の電波が強く入った。一〇日朝香港、マシムを訪ね案内されて中華料理をごちそうになり、帰路のことを頼んだ。さらに、一七日朝七時にシンガポールへ入港、一八日朝五時出帆。コロンボまで一九五〇キロ、インド洋を真西へ進む。二日朝右舷近くコロンボ市が見えて停船。知らせておいたコロンボのセマゲの娘を迎えてくれる。セマゲはセイロンの山奥で坊主になっているエスペランティストのチエク人テヘロの弟子で、雑貨屋、それに文具と平ガラスを扱っている。夜八時半の列車に乗るまで市内見物。インドの

全鉄道駅の切符が買えるので、セイロン北端タライマンナルから渡船でインドに入り、テイルチラパツリまで二等コンパートメントをとる。但しインドに入ると三等で四〇ルピーだ。列車は広広としていて、真ん中が通路で、両側に鍵のかかるコンパートメント。車内には扇風機が二個あり、相当贅沢だ。ボーイにお茶を注文すると、一ルピーで大きなお盆で持ってきた。町で買ったバナナで食事を済ます。

二三日朝六時、終点タライマンナル着。駅で税関検査。この海峡は地図にアダムの橋となっているが、昔は小島の列島になっていたらしい。北へ進行して二時間でインド側の砂浜へ着く。小さな灯台、ヤシ林、草ぶきの漁村があるだけ。税関も線路も半分砂に埋もれている。順に並んで入国手続きを待たされる。田舎の税関だから旅客の持ち物が珍らしくて、いちいち詳しく尋ねる。カメラなんか、使い方が分かるまでうるさく聞く。お菓子には、手を出してみんなが食べてみる。汽車は時間表より二時間も遅れて砂浜の一町も先に停った。ガタガタの三等の古列車だが、疲れてすぐ寝てしまった。

二五日、朝から駅名を見逃さないように、地図と首っ引きである。バンガロール何とか何とかと似た駅が続いていて、うっかりすると間違えそう。一〇時、バンガロール到着。そこへ、二人の青年が駆け寄って来た。メノンとシンパンナだ。駅近くの八世界の果修道場の事務所へ行ってみる。事務所は二階家で本や雑誌も売っている。農夫姿のヴィノバの立派な肖像が目につく。ヴィノバがここへ来たとき、世界中から来る見学者をこの涼しい高原に迎えるため、八世界の果と名付けたという。

ここから車で二時間のところに、農場がある。ヴィノバとこの農場所長U・スワミとガンジラムのラマチャンドラの三人は、ガンジの直弟子で、ガンジ財団の中心人物だ。農場はヴィンシュバネエダムという小さな村で、郵便局があるだけ。商店は一つもない。街道の左手が、農場の入口だが看板もない。入っていくと幾棟かの平家があり、トラクターが一台と、牛が十数頭見えた。シンパンナはこの農業主任、メノンは事務所の主任である。

夜はみんなが集会所へ集まる。タムブラという弦楽器をゆったりした調子で奏し、古代詩のギターの一章を唱える。それが済むと誰かの発言で社会問題、時事問題、農業技術のことなどが出され、討論もやる。スワミがだいたい司会をやるが、少しも指導者臭いところはない。私は、戦争抵抗者になるまでの成り行き、アナキストであるわけ、エスプレントの必要性など、四晩にわたって話した。

インドは、中国とちがって昔から紙に関心が少なかった。古新聞紙一枚欲しくてもなかなか手に入らない。だから便所用の紙はどこにもない。あきかんが一つあって、これに水を入れて便所へ持つて入る。用便後、左手を水でぬらしてツルリと指にからまぬよう落として、また水で指を洗うから紙がいらない。左の指は一切食べ物に触れないし、食べ残りはハリジャンでも食べない。一度人が使ったコップなど全部捨ててしまう。ただ金属製品だけはよく洗ってまた使う。ステンレス製の食器が多いのはそのせいだ。タバコはライスペーパーがないから、巻きタバコはできない。細いビディーという葉巻があつて、一本五錢ぐらいで買える。農場では禁煙だが、隠しタバコをブラックスモークと呼んで、よく私達のところへさがみきた。

酒は法律でいっさい禁止。巡査に見つかるに即座に捕まる。ところがヤシの実を取ったあと、茎をビンにさしこんでさげておくと液がヤシ酒になる。一定の時間がたつと発酵するので、毎日その時間になると飲まねばならない。それでみんな捕まって、手を縛られて送られて行くが、一晩で帰れるのだから平気なものだ。肉食はヒンズーも仏教も禁じているし、回教徒も食べない。マトンだけが許されていて、駅弁などはマトンブリアンニというカレー飯にして売っている。魚は少ないので料理したものはない。市場では、木の台に包丁の刃を上向きに固定して、そこへ魚でも野菜でも押しつけて切る。堅い骨のある魚など、こうすると手をけがする心配がなくて、なかなかよい考えだ。

動物類を大切にするのはインド伝来の「アヒムサ」のせいであろう。シンパンナは農場の牛の名を一つ覚えていて、道で会っても数十頭の名を一つ呼んで頭を撫でる。牛は町の中を自由に歩き回る。餌場は共同で作っており、朝だけ飼主がバケツを下げて来て乳を搾り、その場で売る。衣類に関しては、ガンジーが推奨したチャルカで自分の衣料にする糸を綿からつむぐ。各村落には、その糸と織布の交換所がある。また、どの家にも石器が広く使われ、平石と石のローラーがある。野菜をそれでつぶして煮るのである。

私たちが来ていることがバンガロールの町に広まり、基礎教育大学から招かれて、私は平和運動とエスペラントについて英語で話した。またその大学の農場で開かれた、シャンティ・セナ平和部隊の集会にも出た。稲が実っている中の天幕張りの中で、青年が木の棒を両手に持ってバトントッチのような踊りをおどった。

一月一七日、大会出席のために出発。果物を沢山籠に入れてもらって四時発の汽車に乗る。一月二四日から今日までの二四日間、アシラム農場に厄介になって、私はガンジーとビノバが脚で歩き、手を取って教えた具体的実践のやり方、サルボダヤの万人向上運動の一端に触れ、この眼で確かめたのである。汽車は未知の平地を西へ西へと走る。南インドの山々が近づいてくる。午後三時、アムバトウライ駅についた。新開地らしくブラットホームもない。荷物を下げて人の行く方について行くと、トラックが来てみんなが乗る。「この車は、ガンジークラムへ行くのか」と聞くと、「イエス」との返事で、私も乗り込んだ。

ガンジークラムに着くと立看板が立っている。アルロー・タトゥムがいた。初対面だがお互いに写真で知っていた。「ニッポンのヤマガ?」と握手を求めて来たのは、トニー・スミス。彼はサンジカリスト連盟の仕事もやっているアナキストで、ヘム・デイの友人だがエス語は出来ない。エス語のうまいのは会長ビングとドイツから来る一人らしい。

WRI 第一〇回国際大会

一月二〇日、前の広場によしず張りを作り、各国より持ち寄った印刷物、写真、掲示板等展覧の準備をする。日本から英文説明入りの写真、ビラ、新聞等を出した。

一月二一日、今朝から食堂が広い棟に移り、各国人が一堂で食べることになった。丸いお盆を各自で持って給食係りのテーブルの前を通るときにせてもらって、六人ずつテーブルに着く。今日が大会の第一日。大きな草ぶき、竹の柱の大会堂で主催者側の挨拶。女声の独唱。ラマチャ

ンドラ所長の歓迎の言葉。全員撮影。打ち合わせ会で終わった。

二月二日、七時半朝食、「世界WRI運動パノラマ」と題して、一二人が各国から出て情況報告。日本から山鹿のエスペランソ演説。

二月二四日、大会第四日。クリスマス文化演芸会。朝七時のベルで起床。「平和義勇隊シャンティ・セナの組織について」タトウム書記司会。「平和を作る非暴力の直接行動」をアフリカのサザラントが司会。午後ミカエル・スコットの「大量破壊兵器に反対する直接行動」。午後四時お茶の会。文化の夕は無言劇「誕生」。ドラマ「私はこの無邪気な人の血統ではない」三幕。

二月二五日、大会第五日。日曜の祈りの会。午後分科会。私は男女八人の小集会に出席した。私の出題は「暴力と非暴力の限界の判断」で、「ストライキが起こり、発電所員がメインスイッチを切って、停電させることは暴力か？」とドイツの婦人が発言した。「予告をして決定したのなら例え被害があっても許さるべきだが、当事者は互いにできる限りのつぐないをする度量がなければならぬ。良心の判断が問題だ」と、そしてまた「ガンジーは非暴力が卑怯な行為になるなら、いっそ暴力で反抗した方がよい、と教えている」ことを確認した。午後、「国際警察のような組織が必要か否か」の討論。夕方は大会タレントの会。タミール族の詩人コラツタム紹介。郷土舞踊、古代インド音楽を聞いた。

二月二六日、大会第六日。朝からわらぶきの大集会場に全員集まった。各国から平和運動のチャンピオンが呼び出されて表彰を受けた。「日本ヤマガ」と呼ばれて耳を疑ったが、前へ出ると、ラマチャンドラ夫妻に白木綿のガンジー帽をかぶせられ、緑色のショールを肩にかけてくれ

た。合掌して謝意を表すと満場拍手喝采。私にはなく、日本の平和運動の名誉が表彰されたのだ。明日で大会が終るので、今日はガンジグラムの各工場の見学だ。綿から糸を紡いで織るところ、手すきの製紙工場、石けん工場、穀粉製造を見た。夜はアナキストの集会、図書室に集まってトニー・スマイスが通訳。ベルギーのヘム・デーが「日本でWRIの会員が、沢山脱退したと聞くがそのわけは？」と尋ねられ苦しい言い訳をした。「昨年来の安保条約反対の全国運動で、全学連と民衆とが議会周辺で警察隊と衝突するうちに、女学生の手紙さんが警官隊に押し殺された。その他民衆の被害が多く、非暴力が疑問になった。そして再確認の上、有志だけが改めて再登録したためだ」と答えた。

二月二七日、大会最終日。書記アルロ・タトウムが七日間の大会結果報告と、ステートメント(①万人向上サルボダヤ ②非暴力直接行動 ③軍務拒否 ④国際平和部隊の創設)を発表。二月三一日、汽車が大きな駅に着いた。ぞろぞろみんな降りるから尋ねると、それがマドラス・エグモール駅で、カルカッタ(ホウラ)はここで別の線に乗り換えるとのこと。夕方六時のホウラ行きがでるまで、マドラスのエスペランソ、ドクトル・ティムルティを訪ねた。

一九六一年・一月一日、マドラス・カルカッタ間三等車中。ここまで北へ来ると寒いぐらい。小雨。カルカッタの町は、公園も広くビルは東京より小さいが電車もある。南へ二〇分ほど走った広い柵内の植えこみの中に、二階建てのインド式の寺をみつけた。日本山の道場である。石段の上が本堂らしく青年僧が出てきた。前田行基さんという。丸山行遼さんから聞いていたという

ことで、すぐ本堂の右横の室に迎え入れてくれた。

一月七日、八日にヴィノバがガヤに来るといっているので、早立ちして朝八時半ガヤ駅に着いた。さらに人力車に乗って、南へ一時間半、水のない大きな川に添って走り、村の豪農らしい家に降された。農夫に混って象も働いている。一町ほど向うに宿舎がみえる。主人のドアルコ・ジーは、今ヴィノバと同道して歩いているからここで待てと、ベットのある室に通された。ベランダにも巡礼らしい人々が日なたぼっこしている。夜は大分寒い。丸山行達さんとラジギールの日本山の八木天摂さんが、うちわたいこを叩きつつやって来た。

ヴィノバは間もなく、この前にある大塔の脇の広場に作った演壇で、話をするのだそう。待つ間に大塔なるものを見た。下が四角、上が尖っているコンクリートの塔で、壁には発掘物の土器や石物の破片がおしこんである。シャカがここで暁の明星をみて大悟したとことだが、有名な菩提樹はまだ若い木が数株、石の垣根の中に生えているだけ。その辺の日本服に帯なしのような風態の人はチベットの坊主で、罫りの石の上に灯明を沢山並べて拜んでいる。また二米程の板を地面に敷いてその上で立ったり座ったり運動しているのは、ヨガの修業らしい。

ヴィノバが丸木を組んだ壇上で話を始めた。日本山の二人もあがっている。お説教がすんだのか、ヴィノバが降りてきたが、ぞろぞろ取りまきがついていて近づけない。ガンジールラムで見た白人の女が私達のことを知らせたらしく、こちらへ向って来たので、私はエスペラントで「私は日本のヤマガです。アナキストのセケリが日本に来たとき、あなたのことをいろいろ聞きました」と言うと、彼は英語で、「私はエスペラントでは、話ができない。セケリは私と共に歩いた

同志だ」と言う。セケリの書いたものでは、エスペラントをヴィノバに付いて歩く間に教えたことがあったが、天才のように言われているヴィノバも日常使わないからできないらしい。私が失望している間に、彼は英語でちょっとおあいそを言っただけで人混みの中へ消え去った。

一月八日、朝早くヴィノバは出立したと聞いて、人力車をガヤへ急がせた。ヒンズー教の宿舎の三階にヴィノバがいると聞いて、今日はゆっくり話つもりで上がって行った。彼は日当りのよい屋上で机を置いて、忙しそうに仕事をしている。しばらく待ったがやめない。丸山さんが、「ここで会えるといいんだが」と気をもんでくれたが、仕事中は話しかけないことになっているとかで仕方がない。そのうち、一日一列車よりないラジギール(王舎城跡)行きの発車が迫ったので、諦めるより仕方がなかった。

ガタツク古汽車で一時間半、牛糞の壁の農村を通過してラジキール・クンドに着いた。すぐ向うの小山の連山が昔の鹿野苑(ロクヤオン)でこの辺が祇園精舎、ここが王舎城と、名だけは聞き覚えがある。が、連山は低く、地は荒れ地で、温泉が湧く。少々風邪ぎみだが牧野さんと入ってみた。衣類も脱ぎっぱなしで褌だけになって、石垣のパイプにチョロチョロ流れ出る水で体を濡してから、狭い石段を降りて行くと、薄く湯気が昇っている。湯の中は六帖位のせまい中にギッシリ人が浸っている。四方の石壁には、ヒンズーの神像が彫っており、狭いきたないぬる湯の中で顔を洗ったり、飲んだりしている。これはしまった。私はくしゃみを連発しながら、すぐ上がって、荒地の向うに見える日本山へ行った。熱がでてきたから、アスピリンと生姜湯を飲んで、借りたふとんをかぶって階下の室で寝た。

一月九日、せきが少しおさまったので、一日も早く南の暖かいタンジュールへもどることにし、汽車でカルカタに向った。日が落ちると寒いのにドアは閉まらず私は毛布をかぶって床に腰をおろし一睡もできなかった。風邪と不眠とで半死半生になり、カルカタ駅では一巻の終りかと思った。

一月一四日、朝四時タンジュール着。ベンチで夜の明けるのを待ち、タバコとマッチを買った。牛車を雇った。今度は馴れたためか自信がついて、ラマスワミの家にどうにか辿りついた。さっそく山のようにたまった洗濯を、小僧さんのシャムムーガンに手伝ってもらって、洗うと木にかけて乾かした。すぐ乾くから世話なしだ。

一月一六日、昨日は珍しく雨が降ったがすぐ止んだ。気をつけていたのに下痢になり、断食療法と決めた。エス語を教える約束をしたランガラジャンとびつこのゴヴィンダライとに、床の漆喰にチョークで書いて講義を始めた。

一月一七日、インドの子供はおもちゃがない。私が考案した紙トンビの折りかたや、ブーメラングをボール紙で折ることを教えてやったのが広まり、女学校の校長が、ぜひ学校へ来てやってみせてくれと頼みにきた。

一月二〇日、ゴヴィンダライがアナキズムの説明を聞いて、フリーダムから本を取り寄せるという。

一月二五日、事務所は今夜からサルボダヤの大会のため来客が宿泊する。三六人集まった。私にも話せというので、エス語の文法と英語の不合理なとを比較して話した。

一月二七日、エスペラントの講義も今夜でおわった。

一月二八日、荷作りしているところへ、先日押し花の作り方を教えてやった少年の家から、ハリコの金色の仏像を贈られた。これはおみやげのうち最上のものだ。

一月二九日、スケッチブックは五冊できた。シンパンナにもらったチャルカの練習をしたが、帰るまでには出来そうもない。

一月三〇日、今日はガンジーが殺された記念日。城内の基礎教育学校で集会があり、出席。

二月一日、市内の見物をした。古本屋がただ一軒あった。すみからすみまでみたが、ほしい本はなかった。帰路ホンコンに上陸する時、中共へ脱出できたらと思ひ、ベキンの胡愈之に手引きを頼む手紙を出した。

二月一〇日、ラマスワミ、新入社のランガラジャン、びつこのゴヴィンダライ、少年のシャムムーガンに見送られて、ナマスワミと両手を合わせて、いよいよ出発、帰路につく。列車は海岸の棧橋の上を通って、ダヌシュコディの砂地に着いた。セイロンの渡船の税関吏の調べは、私がヴィノバに会いに行ったと言ったら、すぐOKになった。

二月一日、九時、コロンボ・イースト・フォルト駅着。プラットへ出ると、「シンニョーロ、ヤマガ」と呼びかける人がある。驚いて見ると、ニヤナサッタさんの知らせで来たC・H・ダルマニライチ医師という。「私の家で泊まって下さい。車をもってきました」と、荷物も積んでくれた。町を通りぬけたヤシ林の向うの文化住宅だ。子供二人と夫人とその姉の五人暮らし。兄は二三歳のシダトダム。妹はレエトヘンドラ。二人ともエス語ができる。お父さんは応診に忙

しい。夜九時、コロンボ海岸へドライブした。

二月一二日、朝のラジオは、仏教のシンハリ語のお経で始まる。目下セイロンはタミール語かシンハリ語か、どちらが国語に決まるか激論中だそう。

二月一四日、さあ出発だ。バナナが日本で高いと話したので、今朝は沢山出してくれる。セマゲの赤ぬり車が迎えに来てくれ、別れを告げて乗車。一キロも走った頃、後からドクトーロの車が追いかけて来て、私の忘れた上衣を届けてくれた。MM汽船ラオス号に乗船。ケビン三一〇号。

二月一六日、マラッカ海峡は晴れ渡り刻々赤道に近づくが、まだスマトラもマレー半島も見えない。マンゴーの種でシロンの鬼面を彫った。右に大きな島が見える。太平洋に入ったのか潮が黒い。

二月二〇日、朝七時、船はもうメコン河口を溯航している。曲りくねった葦原の中の徐行だ。サイゴンはずい先だ。水辺のジャングルに気をつけて眺めていても、一羽の水鳥も見当たらない。熱帯植物が水の中まで生えているが、竹は一本もないのはなぜか！

二月二三日、朝七時出帆。メコン河をおりる徐行。午後三時半、河幅は広がり入江に灯台あり。奥には村落が見える。カムボジア領らしい。海上は寒いぐらゐに涼しい。日当りも暑くはない。

二月二四日。ピッチングがひどい。針路北北東。向い風のシケになった。このラオス号は一万五千トン。神戸マルセーユ間、一カ月の航路船。

二月二五日、ピッチングやまず。朝七時ホンコン入港。私は、ペキン胡俞之に宛てた手紙の返事がこの郵便局止めで来ていてOKだったら、そのまま大道寺にあとを頼んで、中共へ脱出するつもりだった。局へいって尋ねたがない。念のため局留係の帳面をも見たがなかった。MM社の来信掲示にも何もなくて、どうすることもできない。計画では、胡の手引きでジャンクでまずマカオへ渡るつもりだった。その時はラオス号が出たころ無電で大道寺に「フネ、ノリオクレタ、ニモツ四コヤマガミカニワタシテクレ」と打つことにしてあったのだが、とうとう竹のカートンを覗きそこねてしまったわけである。それでも万一同、九竜の総闇で一時まで待って、ラオス号へくる郵便を調べたが、やはり駄目であった。同志の馬世倅君が来て、九竜を見物。毛皮の古服をさがしたがどこにもない。昔上海や大連には幾らでもぶら下がっていたものだ。

二月二六日午後四時出帆。サヨナラ香港！東南風が強く、揺れが激しい。ジャンクが勇敢に帆をあげている。

二月二七日、船の揺れ益々激しい。便所へいくのも困難。食堂へ出ない人が多い。四時船内アナウンスあり。台湾が右にみえるとの知らせ。甲板に出ると右十マイルに全島がくっきり画のようにみえる。スケッチをした。

三月一日、朝七時また少し揺れる。四国の沖らしい。何も見えず。九時土佐湾、やがて淡路島も見えないうちに左航に神戸の煙突の煙が見えてきた。午後四時神戸港着岸。出迎えのなかに、崎本、本多君の顔がわかった。私は白いガンジー帽にみどりのショールをかけた。次々と関西の同志の面々が見えた。歓迎会で食べた久しぶりのお寿司が美味かった。

三月三日、朝九時、伊豆沖を通過。向井君に頼まれたWRI大会の報告の総まとめを書き了えた。午後二時横浜港着。出迎えの人々を望遠鏡で認めた。ミカ、アイノ、繁、哲哉、真柄さん、大沢、森島、竜、遠藤、小松、福田君、六角女史など——こうして四カ月にわたる私のインドへの旅は終わった。

『老子直解』出版

印度旅行から帰ってしばらくの間、その報告や何かで忙しい日が続いたが、やがて山鹿の身辺も落ち付いた。その年一九六一年のアナ連大会は、一月三、四日東京で開かれたが、活動報告に対して学生連盟員から強い反対意見が出た。その討論の紛糾は二日目にも尾を引き、大会はついに運動方針案を保留、明年四月臨時大会を開いて、改めてそれらを討議することになった。この大会に出席していた山鹿はほとんど発言せず、身体的にも疲れているようであった。それから一カ月ほど経った。

——二月一七日、自宅で高い棚に右手を上げて物を取った。すぐその下の座ぶとんに座った途端、にわかに口が利けなくなり、腰が立たなくなった。その他別に痛いところもないが、これが親友の近藤憲二君がやられた脳出血らしく、すぐ医者を呼んで診てもらった。夜から次の日にかけて腰骨が神経痛のように奥の方まで痛んだ。四、五日医者が応診して注射してくれたら、腰の痛みは不思議なほど全快して、この分ならまだ当分大丈夫との自信を持った。しかし左の手が痺れていて指先が利かないのと、立ってみると膝に力が入らず、左脚が重くて杖をついてやっと歩ける程だった……。

病状は割合に軽かったらしく、医師の治療を受け、また同志の順天堂の椿宏治教授が来て、養生法を教えてくれたりしたおかげで、六二年の三月末には大分よくなった。そして天気の良い日は、ぼつぼつ近所を散歩できる程になり、メーデー当日には、市川から東京代々木の会場まで思いきって出かけ、クロハタ宣伝販売の仲間入りをして、同志たちを驚かせた。それに左手は自由にならなかったが、幸いにも右手は細字でもかけた。昔から山鹿に手紙を出す、間髪を入れず、びっしり書き込んだハガキで返事が来るので有名だった。その筆まめさは病床でも衰ええず、せっせとハガキを各方面に送り届けて、尚精神の健在ぶりを示した。

——一九三九年に私は老子をエス訳して『世界語老子』を百冊だけ作ったことがあった。それはもう一冊も手許に残っていなかったが、手稿の原本があったので、和エス対訳のものをもう一冊つくるべく、暇ひまの手習いにやりだした。そして六二年五月一三日に書き終えた。

それより先、一九五七年に来日した亡命スペイン人の同志G・グラシヤがヴェネズエラから、ぜひ『老子』をスペイン語訳でも出版したいと言って来ており、そのためにタイプしたエス文『老子』の原稿をすでに送っていた。そのスペイン訳が Viranos E. の手によってほとんど完成し、メキシコで出版されるだろうという便りも刺激になっていた。（これは六三年にメキシコのハ土地と自由社Vから一二三頁A6で出た。）

一方、山鹿によって改めてエス和对訳『老子』が完了したことを聞いた関西地協PBKの会の主として前田幸長君は、これをせめて和文の部分だけでも刊行したいと発起し、PBK文庫の第一冊としてガリ版B6上・下二巻二四六頁の『老子直解——山鹿泰治訳注』を、その年の八月に刊行したのであ

った。山鹿は「死なないうちに書いておく」として、その本の前書き及び後書きに、次のように書いてある。

——老子は老いたる先生という敬称であり、老師匠の意である。中国の歴史に老子の名が出た記事はわずかしかない。彼の姓は李、名は聃、李聃（リ・タン）または、李耳（リ・アル）と呼ばれた。何か耳に特長があったらしい。老耳（ラオ・アル）とも字名された。生年月日は不明だが、出生地については漢の司馬遷の『史記』に楚の国苦県、厲郷、曲仁里の人とある。こんな不吉な地名が実在したとは思われない。彼が何処かの翰林院（図書館）の役員をしていた記事もある。中国史家の意見では、周の烈王から顯王の初年までの数十年間（西紀前三八〇年～四八〇年）の数十年間）の人と思われる。

道教は老子の死後創められた宗教で、複雑な内容をもつ。老、莊、烈子等の説に、中国の民族思潮を織りませ、仏教の隠者の生活や神仙術、陰陽学、星占術、医術等も加えて、神秘宗教に仕上げたものである。この道教は、老子と直接には何の関係もない。老子は一貫して、国家と道徳と称する悪風に強く反対した人である。

老子の著書はこの八一章から成る散文と詩文の一冊だけであるが、これは彼が、中国を去って西の方へ帰らぬ旅途につく時、函谷関の関令尹喜という人の求めに応じて、書き残したものと伝えられる。後人がそれを編集して、上篇と下篇に分け、上篇は第一章から第三十七章まで、下篇は第三十八章から第八十一章で終る。第一章は「道」の字から始まり、下篇は「徳」の字が巻頭にあるので『道德経』とも名づけた。筆記の際の誤伝もあって幾種かの異本が出ているが、みな大差は

ない。しかし中国語は元來文法が不正確で、語根と助辞から成る孤立語であって、特に古文は難解とされている。二千幾百年、時勢の変化のため解釈がまちまちだが、老子の主張した「無為にして自然に同化する」ことが、宇宙と人生の極致であるという精神は変わらない。

古来、老子を訳註したものは多いが、多くは第一章の冒頭から誤訳誤解されている。わが師井上秀天はその著『老子の新研究』によって多くの異本を対照し、なおゼームス・レッグとライオネル・ジュールとウォルター・ゴルン・オールド等三人の英訳と、自らの英訳と対比して誤訳をただした。私は井上秀天と旧交あり、神戸へも訪問して教えを受けたもので、その見解を最も正しいものと信じ、それを基本にして用いた。これはすでに三回目の改訳であるが、まだ満足できない点が多いことを付記する。（井上秀天は、小松丑治らと共に神戸平民倶楽部創設時からのメンバーであり、幸徳大逆事件で危く処刑を免れた人である。山鹿はこのことに全く触れていないが、奇しき縁というべきであろう。）

この刊行は、病中の山鹿への何よりの贈り物であり、また彼を一層励まし慰めるものであった。

たそがれ日記

山鹿は六二年の八月頃から『たそがれ日記』を、思いついては書き、休んではまた書くという具合に、ほとんどの時間をそれに費し始めた。それは、いずれ第二の発作があるだろうことを予期し、それまでの右手がきく間に、一生をもう一度振り返って、思い出すことを書いておこうとするものであった。また丁度そのころ見舞にきた姫路の向井孝が、しつこく回想記を書くことを進め、帰るとすぐ

コピー用原紙をどっさり送ってきたことにも触発されてのことでもあった。『たそがれ日記』冒頭の序に、山鹿はこう書いた。

——この日記は、私の晩年が刻一刻と薄暮の中へ歩み入り——手元が暗くなり、足もとが不確かになっていく心細いような日々のなかで書くものです。エス語でクレープスコ、日出日没時の薄あかり、英語のダスク、夕闇にあたります。私が通ってきた七〇年の、映画でいう溶暗に今しいしだいに溶けさる状態です。もともとそれは天然の作用だから、別に悲しくも嬉しくもない。苦しかったこと恥かしかったことから、永久に逃れられる時が来ると思えば、むしろ喜ぶことかも知れない……。

そして、

最後まで一生をもう一度ふり返って、思い出すことを順序もなく、手の動く間は書いておくことにする。人生の黄昏、薄暮だ。静かに反省する余裕のあることを喜ぶ。

『たそがれ日記』はこのような意味から名付けられ、およそ五年の間に、実に九一篇、コピー用原紙(約三五字×約一八行)にして、五百枚に近いものとして残されたのである。『たそがれ日記』の成り立ちは、こうしてコピー原紙に書かれた手稿が一定量できると、向井宛におくられる。向井は三部をリコピーした上で、表紙と目次をつけ製本する。そのうち一部を手許に残し、あとは原稿と共に山鹿へ返送するというシステムであった。そのようにして送られてきた計八回の手稿によって、全八巻九一篇の『たそがれ日記』が出来上がったのであった。

一卷—二四篇は六二年一〇月に、二巻—九篇、三巻—二一篇、四巻—年表・労働者の暦(IWW機関

紙に連載されたものの訳に補記したもの)、が六三年までに次々と送られて来たが、それからしばらくとぎれた。それで、「まとまった文章でなくても、重複してもかまわない。メモでも書きなぐりでも、内容にこだわらず何でも……」という向井の催促で、再び書き継がれ、五巻—九篇、六巻—一八篇、七巻—一三篇が出来たのは六五年であった。しかし最後の八巻は、もうこれ以上はという程に、時には行が乱れたり、判読しにくい字や、筆勢の弱まりがありありと現れて、半分ほどで中絶したまともかく出来たもの六篇を、「これだけ……」といって向井に手渡したものであった。そして六七年秋以降、まとまったものを再び書く力は、もう山鹿にはなくなってしまったのである。

『たそがれ日記』の長短さまざまな九一篇の内容を分類すると、およそ次のようになる。

④ アナ運動、同志たちのこと、自伝的回想の類——AFの結成・秘密結社大同党・国立上海労働大学・同志渡辺政太郎・華光医院鄧夢仙・玉石同架・思い出の人々・全国労働組合自由連合会・スナップショット・大杉を語る・夢の一生・京都でのアナ大会・両手の辰ちゃん・古本屋の高橋君・エスペラント運動五八年の回顧・スペイン革命の思い出・マヤクのターミナル。

⑤ 技術、または工夫・考案(アイディア)あるいは観察・発見などの類——骨相学・息心調和法・耳根円通法・ローマ字をかく・一輪車にのる・生きた百科辞典—番地入地図・世界電話帳縮刷版・絵葉書で世界一周・電気の話・針工場・エッチング銅版画・マニラ麻で日本紙を漉く・Varno Pumpilio・ちょっとしたこと・私の住んだ家・ラジオ事始め・模型の船体を作る・革命技術。

⑥ 時・空間、宇宙、四次元世界などに関する類——死後はどうなるか・偶然—運命—機械—人間の神化・幽明異境・将来への心配と夢・ミステリーゾーンの実用化。

③ 食事、食物に関する類——人間は何をくうか・魚食の民・台湾の味覚——シナのアジ・Viando de Kambo その他。④ 生活・風俗・習慣に関するもの。⑤ 社会・政治・芸術・文化・思想論。⑥ 男女、生殖に関するもの。⑦ エスペラントの論文——ドドイツ・民謡・諺などのエス訳。⑧ 随筆・紀行などと、多岐多方面にわたり、山鹿の生涯で具現した生活そのものである。

一応山鹿を概念づけるものは、労働者・印刷工であり、エスペランティストでアナキストである——ということになるだろう。しかし、決してそれだけの枠には収まらない一箇の人間、全人的な生活者、偉大とかいう形容詞とはまったく反対のところにある、一庶民としての人生さざまVの八見えな偉大さVに、私たちは改めて気付くはずである。

最後に、山鹿が六五年三月と明記して、五巻の最終篇に書いた「山鹿泰治個人宣言」を抄出しよう。山鹿が自ら自分の生涯を集約した、きわめて現実に即した思想がそこにみられるだろう。

——私は自由である権利がある。また私は、私の生活に入用なものを、社会から受け取る権利がある。私は自分の能力に応じ、社会の必要のために働かねばならぬことを確認する。そして健康が許す限り、働き続けることを公約する。

私はエスペランティストである。そしてエスペラントがただ国際語ではなく、全人類唯一の世界語でなくてはならぬものとして認識する。この見解から、私は八全世界無国籍協会V S A Tに加盟し、会員番号二九〇一九として登録されている。私は国家の一員たることを願わない。それ故世界市民として、一〇〇六七二号に登録されている。

私は一九二九年頃、H・スコットらが主張した学理八テクノクラシーVが、北米エネルギー調

査とエネルギー測定の方法に従って、エネルギーを配給する方法に共鳴する。それが金銭制度を廃止しそれに代わるものであることを信じる。無政府主義を基本とした八アナルコ・テクノクラシーVは、私有財産を廃止する有力な橋頭堡であり、社会秩序を進歩させて、共産主義に向わせる有力な手段となるだろう。

私は八戦争抵抗者インターナショナルV W R Iの会員である。戦争に抵抗することは、戦争の原因を消滅する社会革命に通ずる行動である。

以上の四つのもの、エスペラント、世界市民、戦争抵抗者、アナルコテクノクラシーは、私の宝ものである。

このうちの、アナルコ・テクノクラシーについては、山鹿が電気技術者であったことによって彼の確信となった。アナキストのなかで、一部のものしか興味を示していないが、シドニーのアナキスト詩人ハヴィ・フートンが『リバータリアン・サンジカリスト』誌に書いた論文などが、その主張の代表的なものとして知られている。

近藤憲二と山鹿

近藤憲二は一九五七年一月、山鹿に先立つこと四年前に脳出血で倒れ、長い間の病床生活をつづけていた。彼が運動に近づき、大杉と知り合ったのは一九一五年初めだから、そのことでは山鹿が先輩ということになる。また年も三つ上であった。しかし近藤は早稲田を卒業後、売文社、北風会、労働運動社と運動の中心を歩き、大杉の片腕として、また大杉亡きあと労働運動社の中心となって働いて

きた点で、同志にも一目置かれる立場にあった。一方、山鹿は出沒ただならぬという形で、むしろ運動の上では傍流を自分流に歩いてきたという点で、それほど目立つ存在ではなかった。表の舞台を進行させる裏方のような役割を、地味にそしてきわめて事務的に果たすのが、山鹿の持ち味であった。

その「知る人ぞ知る」山鹿の隠れた真価を、誰よりも深く能く知っていたのは近藤であった。そしてこの二人の間に通う同志愛は、特に晩年、共に病床にあって互いに相手を想う姿は、言葉には表わしがたい、暖かく切ないものであった。向井はその頃上京すれば必ず、たとえわずかでも二人を訪ねることを常とした。それは年一、二回程のことであったが久しぶりの挨拶を済ますと、まず最初の言葉は、「山鹿君のところへ行ったか。どうしてる。どんな具合……」というものであった。

そして一進一退の永い闘病生活で、まるで相手と競争しているように、自分に引き較べてその病状を氣遣う様は、思うままに出会うことができないだけに胸を打つものであった。ところが一九六七年、二人は夢ではなく現実に出会ったのである。より身体不如意の近藤が、大田区雪ヶ谷から千葉県市川市中山の山鹿の家へ訪ねていったのである。近くまで車で行ったとしても、山鹿の家は入口の門から細い道を数十メートル歩かねばならない。その一步一步を運ぶ近藤の足は、介添えされたとしても唯ひたすら山鹿に会う断乎たる意志で動いたにちがいない。そのときのことを、たそがれ日記八巻「この世で近憲さんに再会できた記録」はこう伝えている。

——真柄さんの代筆で、「山鹿様にお会いしたいそうで五月二四日午後、お訪ね申し上げますつもりです。遠藤さんも一緒に行って頂きます」との知らせがきた。同じように悪業を重ね同じように天網を免がれてきたが、ついに同病にかかってしまった。足止めを喰って、死一步手前で待っ

たをかけられて恥をさらしている二人だ。この世でもう一度めぐり会うことなど贅沢と思いつて断念していたのだから、驚いた。ヘキレキ一声、近藤憲二君の勇猛心で、病気を尾行につけて車を手に入れて、はるばる私の宅まで、やって来るといふ！ やると言ったら、必ず実行するアナキストの土根性が、現われたのだ。

インドから帰った年の一二月、私は突然立てなくなった。病状は一進一退だんだん悪く、六年たった。もう△この世Vで再び会えないものと諦めていたのだ。私のいうこの世とは、現有の存在（エグジステンス）のことである。神仏とは関係なく、エネルギーと物質が集まって形成している宇宙のなかの、私が占有している空間と、その中で起こっている諸現象である。だから、他の配列の存在があれば、それはあの世である。そして私が別の存在に現われたら、又そこへ移住するかもしれないのである。

存在は時間と秩序が変わるにつれて、状況とともに絶えず変わる。理屈はとにかく、この世は何時か亡びるのだ。原子核の破裂か星の衝突か。しかし銀河系がなくなっても、広い空間には幾らでも太陽系位のしろものは存在している。しかも、無限に続いて押しかけているのだから気強い。つまりこの世で遂げられなかったことも、他の存在では、いくらでも遂げられる可能性がある。サヨナラの代わりに、またユートピアで会うまで！ と言ってもよろしい。他の存在で会いましょうと言って大丈夫だ。

近憲さんはいよいよ鯛ずしをたくさん持って来てくれた。一緒に並んで、寝て話をした。真柄さん、遠藤さんもおいしい鯛ずしをたくさん食べた。半日間がまたたくまにすぎた。「また会おう」というのが別

れの言葉だった。もちろん今度はあの世でのことである。

翌日のハガキに「……無事七時ごろ帰宅。昂奮したのか、遠藤さんとよる一一時頃までしゃべっておりまして。ホットしました。お礼まで……。」私は、この六月二五日で満七五歳の誕生日だ。

近藤はそれから二年後、六九年八月六日に亡くなり、山鹿はその翌年七〇年一月二六日に死んだ。そして二人にとって「また会おう」という言葉は、もう二度といらなくなったのである。